

英語コーパス学会 Newsletter No. 78

Jul. 5, 2014

■会長:堀 正広
■事務局:〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-8 大阪大学大学院言語文化研究科 田畑 智司研究室気付
■TEL:06-6850-5866 ■郵便振替口座:00930-3-195373(英語コーパス学会)
■URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com ■twitter: @JAECs2012

JAECs
Japan Association for English Corpus Studies

シンポジウム《私の研究テーマにおけるコーパス利用》ご来場御礼

英語コーパス学会主催春季シンポジウム「私の研究テーマにおけるコーパス利用」が4月26日(土) 14:00~17:00に同志社大学(今出川キャンパス) 良心館で開催されました。昨年の英語コーパス学会主催の春季シンポジウムでは、「私のコーパス利用」というテーマで、英語語法、英語文法、英語教育、英語史、英語辞書学そして、英語文体の研究者8名に講師を務めていただき、次の4項目を中心にそれぞれのコーパス利用について発表していただきました。(1) なぜコーパスを使うのか。(2) どのようなコーパスをどのように使うのか。(3) コーパスの威力と限界。(4) コーパスを使う際に注意していること。

今年は、これら4項目を踏まえながらも、「私の研究テーマにおけるコーパス利用」というタイトルのもと、それぞれの研究にどのようにコーパスを使っているかに焦点を当てていただきました。

講師(敬称略)及びタイトルは次の通りです。

- 「序論」及び司会 堀正広(熊本学園大学)
1. 「チャーターの写本と刊本の比較」
地村彰之(広島大学)
 2. 「構文解析コーパスによる時代区分」
塚本 聡(日本大学)
 3. 「ディスコース・レジスターから見た言語形式再考のためのコーパス利用」
梅咲敦子(関西学院大学)
 4. 「EFL 環境下における語彙指導と MALL」
石川保茂(京都外国語大学)
 5. 「L2学習者研究手段としてのコーパス」
石川慎一郎(神戸大学)
 6. 「統語分析、意味分析へのコーパス活用」
新井洋一(中央大学)

各講師の発表の概要と当日配布された資料は、学会のホームページに掲載されていますので、ご覧ください。(http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/WhatsNew/symposium2014.html)

各講師の発表後、質疑応答がなされました。以下に質問と回答の要旨を記載いたします。

地村先生への質問

質問:異なる版を比較される場合、ある文字列が別の行に移動している場合は、どの様に分析しているのか?

回答:今回行った『カンタベリー物語』の写本と刊本比較(6つのテキスト比較)では、散文を除いて韻文のみを扱った。各行の最後に改行キーが入っていて、ある文字列が別の行に移っているということはなかった。ただし、1995年に出版したテキスト比較のデータでは、散文が含まれていたため、各行を揃えるのにかなりの時間がかかった。

塚本先生への質問

質問1:「新しい英語史の時代区分」の提案はあるか。

回答:今回の数量的調査では、確かに初期近代英語の終了時期(1700年頃)は言語変化が多くないので、従前の時代区分が適切ではない可能性はあるが、今回の試みでは、この基準のみで新しい時代区分を提案できる段階ではない。

質問2:以前の研究で、言語項目を説明変数、年代を目的変数とした回帰分析を行っておられたが、他のデータでも同様の回帰分析を行っているか。

回答:今回のデータでも回帰式が可能かどうか試行的に検証してみたが、前回の研究と同様に wh 語が説明変数として含まれていたため、基本的には回帰分析が成り立つものとも思われる。

梅咲先生への質問

質問：自分の研究にコーパスを利用するようになって研究テーマは変化したか。変化した場合はどのように変化したか。

回答：1989年、私が大学院で勉強したいと思った理由が、それまで手作業で行っていた用例収集にコンピュータを利用する研究方法を試すことだったので、最初からコーパスを使った分析を行った。ただ、当初は100万語のコーパスを今からすれば限られたPCの能力で分析していたので、量的データとしては不十分だった。汎用コーパスの規模が、1千万語単位から億単位、さらに10億、更にその上の単位の検索、統計データが容易に手に入るようになり、コロケーション、フレイジオロジー研究を飛躍的に進めることができるようになった。また *n*-gram を利用した定型表現の抽出なども始めた。

次に、「コーパスの威力と限界について話してください。」という質問がありました。講師の皆さんにお答えいただきましたが、地村先生の回答のみをご紹介します。

回答：コンピュータの威力はただ驚くばかりである。学生の頃、手作業で行っていたことがあっという間に処理され、必要な資料を即座に提供してくれる。ただし、そのような目の前にある客観的なデータの意味内容を深く読み取るのは、自分自身の能力しだいである。自らの頭をフレキシブルにしていく必要性を感じる。

最後に、司会者の堀から「ご自分の研究にコーパスを利用するようになって、これまで失敗したこと、あるいはこのようなことにもっと気をつけるべきだったと思われたことはありますか。ありましたら具体的にお聞かせ願えないでしょうか。」という質問をいたしました。各講師の回答を記載します。

地村先生

失敗というのではなくて、もっと気をつけるべきであったという方がいいと思われること。1995年に最初のテキスト比較（『カンタベリー物語』）の資料を出版したとき、Blake版（1980年）とRobinson版（第2版）（1957年）の二つをコン

ピュータで比較した。1995年にはRobinson版の改定版（第3版）The Riverside Chaucer（Benson版）（1987）が出版されていたので、それを比較対象のテキストに加えなかった。ただし、これにはこだわりがあり、私の世代の人たちは先生（梶井廸夫先生）からチャウサーを教えていただいたときは、Robinson版だった。学部4年生の時アメリカ留学をし、そこで教えていただいた先生（Gruber先生）が使用されたテキストもRobinson版だった。つまり、Robinson版をベースにするのが当たり前と思っていた。しかし、それ以後、Benson版をテキスト比較の対象テキストに必ず入れてる。いい教訓になった。さらに、データを作成し終わると、それで結果が出たものと思ってしまう、その後の作業が遅くなってしまうことがある。

塚本先生

複数回行った検索結果が一致しないことがあった。構文解析コーパスのPenn-Helsinki Parsed Corpusを活用しているが、その検索には検索コマンドファイルを作成する必要がある。論理和や論理積を複数組み合わせた条件で検索する際、条件指定の順序を変えるとヒット数が異なることになり、前に行った検索すべてのやり直しを余儀なくされた。サブセットを作り、検索条件が適切かどうか、十分に検証することが大いに重要であると実感した。

梅咲先生

共起語を見出す際に、複合語が共起語の場合、検索の仕方によっては、1語目を共起語と勘違いしてしまうことがある（例：income taxで、incomeを共起語と取ってしまうなど）。また、例えば、出現した用例を、検索で得たい形式と考えようとしてしまう（例：itがto以下を指す例を探している場合、itが前述の名詞であることを見逃してしまうなど）。

石川保茂先生

語彙リストを作成するため言語データを収集・コーパス化・分析し、その結果を見ると、教員のインテュイションによって想定した語彙がリストされていない、という場合が複数回あった。そういった場合には、言語データの収集からやり直すことになり、かなりの時間的労力を費やすことに

なってしまった。この失敗の原因は、最初に収集する言語データを吟味することによって防ぐことができるのだが、経験上、コンコーダンサーとインテュイションの齟齬を解消することは難しいと考えている。

石川慎一郎先生

コーパス研究では基礎資料として語句の頻度が重要な役割を持つが、性質を異にする各種のコーパスから正確に頻度を取り出すことは必ずしも平易ではない。この点、自戒しつつ研究を続けている。

新井先生

大きな失敗にならないように、事前に試し検索を色々とおこない、検索結果を調べて、検索を工夫するとか、テーマそのものの変更を考えたりしている。

以上、シンポジウムの質疑応答の内容をお伝えしました。各自の研究におけるコーパス利用を振り返り、そしてまた確認し、さらに新たなコーパス利用の可能性を見いだす契機になれば幸いです。

シンポジウム後、場所を移して懇親会を開催しました。懇親会は、関西外国語大学の村上裕美先生のご紹介で、日本最古のエレベーターとシンプルなデザインの学校・教会建築を数多く残したヴォーリズ氏の建築で有名な本格的北京料理の東華菜館本店で行いました。加茂川と川向こうの南座の眺めはまさに京都の風情そのものでした。今回は、学会の会計を依頼しているセクレタリー・オフィス・サービス乾泰子様もお招きしました。参加者一同京都の春の宵を堪能しました。

最後になりましたが、本シンポジウムの企画段階からお世話いただいた新井洋一先生、講師をお務めいただいた先生方、大変すばらしい会場をお貸しいただき、いろいろと便宜を図っていただいた西納春雄先生、そして当日お世話いただいた、長谷部陽一郎先生、会場業務をサポートしていただいた学生の皆様、そして会場に足をお運びいただいた参加者の皆様に心より御礼申し上げます。

堀正広（熊本学園大学）

第 40 回大会のご案内

英語コーパス学会第 40 回大会は、10 月 4 日（土）および 5 日（日）の 2 日間、熊本学園大学にて開催されます。キャンパスへのアクセスは、JR 熊本駅から熊本都市バス 3 番のりば（白川口）から約 20 分で到着とのことです。熊本学園大学のウェブサイトには詳細なアクセス情報がありますので事前に経路と時刻をご確認ください。

<http://www.kumagaku.ac.jp/daigaku/map/access>

第 40 回大会は九州で開催される初めての大会となります。現在、会場校の堀正広先生、渡辺拓人先生に鋭意準備を進めていただいております。大会の目玉の一つとしましては、大会企画委員会（滝沢直宏委員長）の立案のもと、藤原康弘先生（愛知教育大学）、石井康毅先生（成城大学）をコーディネイターに「英語教育における教材コーパスの構築とその利用」（仮題）というテーマでワークショップならびにシンポジウムを企画していただいております。もう一つ、特別講演では、田中省作先生（立命館大学）にご登壇いただく予定です。どうぞご期待ください。

詳細については、8 月下旬に送付予定の「大会資料」をご覧ください。

会誌『英語コーパス研究』第 22 号論文投稿募集について

『英語コーパス研究』第 22 号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフトウェア紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締め切り】2014 年 9 月 30 日（火）

氏名、所属、原稿の種類とタイトル、連絡先住所を下記の原稿提出先まで電子メールにてお知らせください。メール件名は「『英語コーパス研究』第 22 号投稿申込」とし、メール本体に上記の情報を箇条書きで記入ください。

【原稿提出締め切り】2014 年 11 月 30 日（日）

電子メール添付にて提出してください。提出方法等についての詳細は学会 Web ページの投稿規定 http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/Guidelines/ECS_SGuide-j.pdf を参照してください。

※なお、本文や図表の体裁および参考文献目録の表記の統一などに関して第 21 号を参照の上、十分にご配慮ください。

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒651-2197 神戸市西区学園西町 8-2-1

兵庫県立大学・経済学部 瀬良晴子

TEL: 078-794-7084

e-mail: sera@econ.u-hyogo.ac.jp

【原稿の長さ】(厳守ください)

1. 研究論文

和文：A4 サイズ 1 ページあたり 35 字×30 行、17 枚以内 (10.5 ポイント (MS 明朝) 使用)

英文：A4 サイズ 1 ページあたり 70 ストローク×35 行、17 枚以内 (10.5 ポイント (Times New Roman) 使用)

※いずれも Abstract (英文)、図表、注、参考文献目録、付録を含む

2. 研究ノート

研究論文の書式と同様で、12 枚以内

※いずれも Abstract (英文)、図表、注、参考文献目録、付録を含む

3. その他

研究論文の半分以下

【書式】

第 21 号所収の論文を参考にしてください。詳細は上記の学会 Web ページで確認ください。

【採用通知】2015 年 1 月下旬

【刊行予定】2015 年 5 月下旬

※なお、投稿申込 (9 月末締め切り) への応募の有無に関わらず、11 月末の原稿締め切りまでに投稿頂ければ、会誌への投稿は可能です。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
瀬良晴子 (兵庫県立大学)

東支部活動報告

英語コーパス学会東支部

《講習会・研究発表会》

【日時】2014 年 3 月 8 日(土) 10:30~16:10

【場所】日本大学文理学部 (東京都世田谷区)

【参加費】会員無料・非会員 1,000 円

講習会：BYU コーパス入門 10:30~12:30

[図書館 3 階 ML1 教室(CALL 教室)]

講師：新井洋一 (中央大学)

概要

当日会員 10 名を含む 38 名の参加者のもと、はじめに、BYU コーパスの概要説明ののち、BYU-BNC を用い、語、句の検索、ワイルドカードの検索や lemma を用いた応用例まで及んだ。to/on his/her face などでは、所有格人称により大いに生起数が異なることなど、実例を見なければわからない言語の例も示された。また、COHA を用い、so ADJ as to V や end up -ing などの表現の時系列変化を BYU の機能を活用しながら示し、本オンラインコーパスの有効活用術を実習した。

研究発表会：13:30~16:10 [図書館3階 ML1 教室(CALL 教室)] (参加者約30名)

司会：大和田栄 (東京成徳大学)

研究発表 1 13:30-14:00

「日本人英語学習者による基本動詞使用の課題：習熟度の見直しに基づく研究」

井上聡 (環太平洋大学)

統計分析により、日本人学習者の過剰使用、過少使用となる動詞を、say, want, および tell, ask となること、教科書ではこれらの語は過剰使用されていないにもかかわらず、過剰使用してしまうことを明らかにし、今後の教育現場での示唆を与えた。

研究発表 2 14:00-14:30

「高校検定英語教科書のテキストに占めるコロケーション割合の考察」

清水真弓 (バーミンガム大学大学院生)

高校教科書をサンプル調査し、その中でのコロケーションの割合を Bank of English などと比較しながら検証したところ、54%もの語がコロケーションとして認定できること、一方学習者はこれ

らがコロケーションであるとの認識に欠け、その欠如が英語の習得を妨げる要因となることを明らかにした。

研究発表 3 14:30-15:00
「身体部位所有者上昇構文における前置詞の役割:
*bit*を中心に」 野中大輔 (東京大学大学院生)
bit NP *in / on* NP の形式に着目し、BNC からの用例から、働きかけの方向が前置詞の選択に大きく関連していること、この選択は *bit* に特有の現象で、この表現はコロケーションとして扱う必要性があることを明らかにした。

司会 山崎俊次 (大東文化大学)
研究発表 4 15:10-15:40
「非制限的不定詞関係節の特性と適格性」
秋山孝信 (日本大学)
非制限的不定詞関係節の生起条件について、BNC から検索された各例を詳細に検討した結果、意味的には *be to* 構文との類似性が見られること、空範疇とその解釈処理に伴う負担量の大小から、構文の適格性に影響を与えていることを明らかにした。

研究発表 5 15:40-16:10
「*The Cuckoo's Calling* 著者推定問題と著者内変異」
久保田俊彦 (明治大学)
J. K. Rowling が偽名で発表した *The Cuckoo's Calling* の著者推定問題を報道した *The Sunday Times* の記事の信ぴょう性について、自らソフトを用い、調査が不十分であったこと、著者間と同時に著者内変異にも十分な配慮を払う必要性を明らかにした。

《Geoffrey Leech 先生講演会》

2014 年 5 月 24 日、英語コーパス学会東支部および岩崎研究会の共催の形で、Corpus Linguistics and its contributions to descriptive grammar との演題にて標記の講演会を東京外国語大学にて開催した。約 50 名の参加者があった。

投野先生の司会で始まった Leech 先生の講演は、個別のトピックではなく、コーパス言語学のもたらした成果を俯瞰する内容の講演であった。Jespersen, Poutsma など、記述文法の言及から始まり、コーパス登場以前は頻度については無関心で

あったこと、動詞の語形についての母語話者の持つ直感とコーパスデータの示す実態との乖離、副詞など理論文法では疎かにされる周辺的な文法事項に対する貢献、頻度データを出発点とした心理言語学での有効性、頻度と関連性の高い Gradience への貢献、など広範な分野に及ぶものであった。これらを要約として、Grammatical Variation, Grammatical Change, Lexico-grammar という 3 点を特に貢献度合いの多いものとして挙げていた。



質疑では、コーパスサイズの問題、多言語のコーパスの状況、コーパスと言語教育のことなどの質問があった。Quirk et al. (1985)の改訂版の有無を尋ねる質問もあったが、残念ながら著者の年齢的な問題や出版事情から難しそうとの回答であった。

講演会の最後に、度重なる本学会での講演、およびコーパス言語学に対する貢献に対し本学会より Leech 先生に感謝状の贈呈を行った。すでに名誉会員としての賞状があるので、この賞状で 2 つ目となる、この 2 つをそろえて書齋に飾るとのお言葉をいただいた。



この授与をもって、大変和やかな中での講演会終了となった。なお、本講演会に際し、Leech 先生の日程調整等、創価大学藤本和子先生にご尽力いただきましたこと、この場を借りて感謝申し上げます。

東支部長
塚本聡（日本大学）

※講演会后、Leech 先生より会長宛に大変丁寧なメールが届きました。英語コーパス学会からいただいた感謝状は大変名誉に思っていることとその思いを会員の皆様にお伝え願いたいとの内容でした。

事務局

Dear Professor Hori,

I wanted to get in touch with you to thank you, as President of JAECS, for the wonderful gift of artistic cuff links and tie pin from the Kumamoto area, and also for the Certificate of Appreciation that Prof. Yukio Tono presented to me at the JAECS meeting in Tokyo. I value my connection with JAECS very much, and I was both proud and humble (if one can be both) to receive them. I will be very happy if you report my deep gratitude to your colleagues in JAECS.

with best wishes and appreciation

Geoffrey Leech

新入会員紹介（6月30日現在、Sは学生）

荒川和仁	東京外国語大学大学院 S
池尾玲子	専修大学
大熊洋祐	東京外国語大学大学院 S

大矢政徳	目白大学
小山義徳	千葉大学
神谷昇	千葉大学
木村美紀	明治大学大学院 S
土村成美	明治大学大学院 S
土屋知洋	防衛大学校
西原俊明	長崎大学
西村嘉人	名古屋大学大学院 S
野中大輔	東京大学大学院 S
平尾日出夫	追手門学院大学
松浦加寿子	くらしき作陽大学
吉田和史	秀明大学
渡邊知子	学習院女子大学

理事会の決定事項について

4月26日（土）11時より同志社大学今出川キャンパスで開かれた理事会におきまして、以下の議案が審議されました。

■人事について

(1) 会長の再任について

理事会で堀正広会長の再任が決定されました。それに伴い、会長により副会長投野由紀夫先生、事務局会計小島ますみ先生、事務局長田畑智司の再任命がありました。

(2) 理事の退任・新任について

理事退任：赤野一郎先生（京都外国語大学）
理事退任：西村道信先生（大手前大学）

3月末をもって赤野先生、西村先生は理事の定年を迎えて退任なさいました。お二人の先生方には当学会の前身である英語コーパス研究会の発足時から長きにわたってリードしていただき、当学会の発展に多大なるご尽力をいただきました。赤野先生、西村先生、お疲れ様でした。今後ともご指導のほどよろしくお願い致します。

理事新任：家入葉子先生（京都大学）
理事新任：石川慎一郎先生（神戸大学）
理事新任：中條清美先生（日本大学）

4月より家入先生、石川（慎）先生、中條先生が新しく理事に就任されました。いずれも各分野の第一線でご活躍の先生方です。これからどうぞ

よろしくお願ひ致します。

(3) 機関誌『英語コーパス研究』編集委員長・委員の退任・新任について

委員長・委員退任：岡田毅先生（東北大学）

委員長新任：瀬良晴子先生（兵庫県立大学）

岡田先生には、これまで10年にわたって機関紙の編集にご尽力いただきました。特に2010年度から2期4年間委員長の重責を担っていただきありがとうございました。第20号で刷新された機関誌の装丁は岡田先生のお骨折りの賜物です。

4月より岡田先生の後任として、瀬良先生がご就任されました。瀬良先生には大変お忙しい中、激務の役職をお引き受け下さりありがとうございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

委員退任：小林多佳子先生（昭和女子大学）

委員新任：田中省作先生（立命館大学）

委員新任：能登原祥之先生（同志社大学）

小林先生、4期8年の長きにわたり大いにご尽力いただきまことにありがとうございました。田中先生、能登原先生、これからどうぞよろしくお願ひいたします。

(4) 大会企画委員長の退任・新任について

委員長退任：滝沢直宏先生（立命館大学）

委員長新任：西村秀夫先生（三重大学）

滝沢先生には、機関誌刊行と並ぶ重要な学会活動である大会開催の企画立案に2期4年にわたって大会企画委員長としてご尽力いただきお礼申し上げます。新委員長には西村先生にご就任いただきました。これからどうぞよろしくお願ひ致します。

(5) 広報委員について

新理事の石川慎一郎先生に広報委員をお務めいただくことが決まりました。石川先生にはウェブ委員の金澤俊吾先生（高知県立大学）と阪上辰也先生（広島大学）とともに早速当学会の独自ドメイン取得ならびにウェブサイトの刷新に向けて鋭意取り組んでいただいております。

■2013年度決算報告と2014年度予算案について

会計の小島ますみ先生（岐阜市立女子短期大学）より、古田八恵先生により監査を受けた2013年度決算の報告と2014年度予算の提案があり、審議の結果、承認されました。詳細は後日メーリングリストにて配信致します。2013年度決算報告書ならびに2014年度予算案をご覧ください。

■後援依頼について

本年9月19日～20日に筑波大学にて開催される第4回日本デジタルヒューマニティーズ学会（Japanese Association for Digital Humanities）年次国際会議（JADH 2014）への財政支援を伴う後援依頼について了承されました。デジタル環境下の人文学を推進するJADH国際会議の射程には当学会の活動領域に属する研究・教育分野も含まれております。

■今後の大会日程と開催校

第40回大会 2014年10月4-5日 熊本学園大学

第41回大会 2015年10月3-4日※ 愛知大学

（※F1グランプリが同日程で開催の場合、名古屋市内のホテルの予約が大変困難になるため、大会日程変更の可能性もあります。）

事務局から

◇会費納入のお願い

2014年度会費（一般5,000円、学生3,000円、賛助会員15,000円、理事10,000円）を、日本郵便にある払込取扱票を使ってお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします〔振替口座：00930-3-195373〕。日本郵便発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。別途領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、小島ますみ（〒501-0192 岐阜市一日市場北町7番1号 岐阜市立女子短期大学）までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2014年度分と併せてお納めください。会誌『英語コーパス研究』第21号は2013年度の会費を納入していただいた方のみ、送付いたしております。また、2年続けて会

費未納の場合、機関誌等の送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

※ 会員の皆様には、日頃より会費の当該年度内納入のご協力をいただきまして、お礼申し上げます。会費を滞納されますと、退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては、円滑な学会運営のためにご協力いただけましたら幸いです。なお、退会を希望される場合は、当該年度内に事務局までお知らせくださいますようお願い申し上げます。

◇ニューズレターの電子化移行について

今回のニューズレター（第78号）よりメーリングリストならびに当学会ウェブサイトを紹介した電子版のみの配信となります。メーリングリストに未登録の会員の皆様はお早めにご登録いただきますようお願いいたします。メーリングリスト新規登録・変更は事務局宛にご一報下さい。

◇所属・住所・電子メールアドレス変更お知らせのお願い

会員の皆様方には、ご所属、ご住所、電子メールアドレスに変更が生じた場合、速やかに事務局宛ご連絡いただけますようお願い申し上げます。

◇寄贈刊行物の紹介

赤野一郎・堀正広・投野由紀夫編著（2014）『英語教師のためのコーパス活用ガイド』大修館書店〔赤野一郎先生・堀正広先生・投野由紀夫先生・加野まきみ先生より寄贈〕

<http://plaza.taishukan.co.jp/shop/Product/Detail/21174>

Yoko Iyeiri & Jennifer Smith (eds.) (2014) *Studies in Middle and Modern English: Historical Change* (Osaka Books Ltd.). [家入葉子先生・谷明信先生・中尾佳行先生より寄贈]

<http://homepage3.nifty.com/iyeyiri/jshell/Osaka4.htm>

Shin'ichiro Ishikawa (ed.) (2014) *Learner Corpus Studies in Asia and the World Vol. 2* (School of Languages &

Communication, Kobe University, 2014). 451 pages. [石川慎一郎先生より寄贈]

http://language.sakura.ne.jp/icnale/symposium_2014.html

石川慎一郎（訳）、トニー・マケナリー、アンドリュー・ハーディー（著）（2014）『コーパス言語学 手法・理論・実践』ひつじ書房〔石川慎一郎先生より寄贈〕

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-705-8.htm>

岩井千春（2014）『ESP 教育のニーズ分析 産学のグローバル人材育成を目指して』大阪公立大学出版会〔岩井千春先生より寄贈〕

<http://www.omup.jp/modules/tinyd1/index.php?id=123>

藤原康弘（2014）『国際英語としての「日本語」のコーパス研究 —（日本の英語教育の目標）』ひつじ書房〔藤原康弘先生より寄贈〕

<http://www.hituzi.co.jp/hituzibooks/ISBN978-4-89476-687-7.htm>

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FORUM

◆ 新刊紹介

Michaela Mahlberg, *Corpus Stylistics and Dickens's Fiction* (New York and London: Routledge, 2013, 221 pages) ISBN 978-0-415-80014-3

本書は英国ノッティンガム大学教授 Michaela Mahlberg 氏の最新の著書である。Mahlberg 氏は、*English General Nouns: A Corpus Theoretical Approach* (Amsterdam: John Benjamins, 2005) の著者であり、またジョン・ベンジャミン社から刊行されている学術誌、*International Journal of Corpus Linguistics* の編者長でもある。今年 4 月にノッティンガム大学で開催された ICAME の主催者でもあった。

Mahlberg 氏の関心はコーパス言語学全般ではあるが、最近の業績を見ると文学作品を対象としたコーパス文体論関係のものが多く見られる。いく

つか例を挙げると, Hoey, Mahlberg, Stubbs, Teubert (2007)による *Text, Discourse and Corpora. Theory and Analysis* では, “Corpus stylistics: bridging the gap between linguistic and literary studies” を執筆し, 10巻からなる *The Encyclopedia of Applied Linguistics* (2012)では “Corpus Analysis of Literary Texts”を担当している。また今年出版された *The Routledge Handbook of Stylistics* では“Corpus stylistics”を執筆している。英語コーパス文体論関係の論文に関しては, とくに 19 世紀の英国小説家 Charles Dickens の文体分析の論考が多い。

本書はタイトルが示すように, 2 つの側面がある。1 つはコーパス文体論の理論的な枠組みを提示すること, そしてもう 1 つはその実践で, Dickens の小説のコーパスを使った文体分析である。各章の要旨を紹介し, 興味深い分析結果を 2, 3 例挙げる。

第 1 章 “Corpus Stylistics” では, コーパス言語学と文学的文体論の両者にまたがるコーパス文体論の考え方を概観している。コーパス文体論における言語分析と文学的解釈の関連性が説明されている。コーパス文体論とは, 量的なデータを手に入れるためにコーパスを利用した文体論ではない。コーパス文体論とはコーパス言語学の手法を援用して得られた, 言語学的な記述を文学的な解釈で説明することによって, 文学テキストの分析を行う学問領域である。したがって, コーパスを使って言語的なパターンを見いだし, 文学的な解釈と関連づけることができること, コーパス文体論の強みが最もよく発揮されることになる。

第 2 “Textual Building Blocks of Fictional Worlds” では, 文学作品における人物描写は現実世界の人物との認知的な関わりを前提として形成され, 繰り返される外見や行動の表現は人物描写の創造に寄与していることを指摘している。そして, Dickens の作品における代表的な人物の形成にはクラスターが大いに関わりがあると述べている。フィクションの世界の構築において, 繰り返される外面的な描写の表現はどのように解釈されるかを明らかにしている。

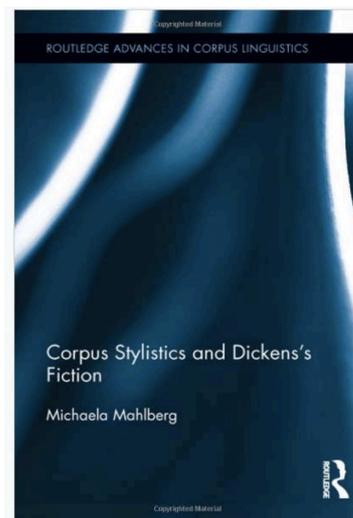
第 3 章 “Starting with the Texts: Corpora, Clusters, and Lexical Bundles” では, まずコーパス言語学とコーパス文体論の学問的な関心の違いを述べている。コーパス言語学では, 多様な異なったテキスト間に共通する一般的な言語特徴を探ることに関

心があるが, コーパス文体論は個別のテキストに特有な特徴を明らかにすることに関心があるとしている。そして, 5 語からなるクラスターに着目することが, テキストの特徴を明らかにするための有効な出発点であることを論じている。本章では, Dickens

コーパスのテキストや Dickens を除く 19 世紀英国小説のコーパスの概要が説明され, 2 語, 3 語, 4 語, 5 語のクラスターの調査結果が示される。その調査結果に基づいて文学的な解釈が行われる。それぞれのクラスターに関して興味深い指摘がなされるが, 5 語からなるクラスターが最も各テキストの特徴を浮き彫りにすると結論づけている。

第 4 章 “Groups of Clusters for the Identification of Local Textual Functions” では, Dickens の作品 23 のコーパスと Dickens 以外の 19 世紀の英国小説 29 作品のコーパスにおける 5 語からなるクラスターを調査し, 分類している。その分類はまず, 統計的に 5 語からなるクラスターのうち key clusters を調べている。その結果, *his hand in his pockets, the father of the marshalsea, the person of the house, do me the favour to, as if he would have* などが 19 世紀のコーパスと比較して, Dickens に特徴的なクラスターとなる。また, すべてのクラスターは次の 6 種類のクラスターに分類される。(1) Labels (2) Speech clusters (3) Body Part clusters (4) As If clusters (5) Time and Place clusters (6) Others clusters.

(1) Labels とはそのクラスターの中に固有名詞, あるいは固有名詞に相当するものを含んでいるもので, 人物に特有なクラスターである (e.g. *mr pickwick and his friends*)。 (2) Speech clusters は会話に見られるクラスターである (e.g. *how do you do sir*)。 (3) Body Part clusters は体や仕草を表す語を含むクラスターである (e.g. *his head on one side*)。 (4) As If clusters は *as if* を含むクラスターである (e.g. *as if he were a*) (5) Time and Place clusters は時間や場所を表す語を含むクラスターである (e.g. *at the upper end of*) (6) Others clusters はそれ以外のク



ラスターである (e.g. *make up his mind to*).

第5章“Character Speech”では、登場人物の会話において5回以上出現する5語からなる108のクラスター (clusters) に着目し、その機能を4種類に分類している。(1) Negotiating information, (2) Turn-taking, (3) Politeness formulae, (4) First-person narration. これら4種類の機能の他に、同じクラスターが文脈によって異なった機能で使われる例もまた文学における重要な言語使用であることを指摘している。その一例として、対立的な状況に置く *what do you mean by* を紹介したい。このクラスターは1000語あたりの頻度では、*Oliver Twist* が最も多く、次に *Pickwick Papers (PP)* と *Christmas Carol (CC)* が続く。作品の長さが異なるので、実際の出現回数は *PP* で13回。すべて *Pickwick* に関連して使われている。そのクラスターの問いは、Sam を仲介として、observer of human nature としての主人公 *Pickwick* の世界と現実世界との違いを浮き彫りにしている。これ以外にも *PP* では *what do you want here* や *what have you got to* のクラスターの使用が、Dickens の他の作品に比べ多く使われ、このようなクラスターを通して *PP* の作品世界や *Pickwick* 自身の世界観を垣間見ることができるとしている。そしてこの章の結論として、このようなクラスターの解釈においては文脈が重要な働きをなしていること、そして、ここでは5語からなるクラスターの分析を行ったが、もっと語数の少ない、あるいは多いクラスターの分析はフィクションの世界の構築におけるクラスターの役割を明らかにしてくれるだろうと結論づけている。

第6章“Body Language”では、最初に Korte (1997) の body language の描写に関して一般的なモデルを概観し、小説における body language の描写と人物描写や人物の心理との関係性を指摘した後、body parts を含むクラスターを調査している。そのクラスターの調査に基づいて、暖炉での登場人物のポーズを表すクラスター、eyes を含む興味深いクラスター、*his hand upon his shoulder* などの5語からなるクラスター、空の body language などについて論じている。

暖炉での登場人物のポーズに関するクラスターでは、*with his back to the* が Dickens corpus にも19世紀の小説のコーパスにも高頻度で出現する。特定の人物に対して使われているわけではない。特徴的なこととして、このクラスターの後には *fire,*

fire-place, chimney-piece など暖炉を表す語彙が共起し、またこのクラスターの前には *standing* が共起するという。ところが、女性に関しては、*with her back to* のクラスターの場合は、用例そのものが少なく、*fire* と共起する例は1例のみで、さらに共起する動詞は *sat* や *sitting* で、*standing* ではないという。ここには明らかにジェンダーの問題があり、暖炉に背を向けて立つ姿は男性であり、これは19世紀小説のコンベンションと指摘する。そして、Dickens の作品中の *Dombey and Son* の Mr. Dombey や *Little Dorrit* の Merdle の暖炉に背を向けて立つ姿は、単に二人の特徴的な描写だけでなく、19世紀小説におけるコンベンションを背景に、男性の権威の象徴の立ち姿である、と結論づけている。

第7章“*As If* and the Narrator Comment”はこれまでの章とは異なり、クラスターではなく、*as if* のコロケーションを扱い、登場人物の振るまいとその振る舞いに対する語り手のコメントに焦点を当てている。具体的には、*as if* の左方5語に20回以上出現するコロケーションを次の8つのタイプに分け、*as if* を使う際の語り手のコメントのパターンを明らかにしている。Action verbs (例: *made, turned, went, stood, stopped, came*) , Body parts nouns (例: *head, hand, hands, eyes, face, back, mouth, arms, arm, lips*) , Settings (例: *door, fire, room, slide, chair, wall*) , Manner (*manner, way, air, seemed*) , LOOK (*looked, looking, look, looks*), SPEAK (*said, speaking, spoke, voice*), FEEL (*felt, feel*), Other (*time, moment, man, round, down, again, little, almost, very, great, now, well, quite, still*)

as if のパターンの例を1つ挙げると、*as if* が使われる前に、ある人物への言及があり、その人物の動きや仕草に関する語彙、たとえば action verb や body part や setting に関する語が共起し、その動きや仕草への語り手のコメントが *as if* で提示されると分析している。そして、この *as if* のパターンと body language の描写の共起は語り手の存在と密接に結びついていることを示している。

第8章“Labels: Contextualising and Highlighting Functions”では Label として分類されるクラスターで、5回以上繰り返される432のクラスターの中で、1つの作品にだけに現れる406のクラスターに焦点を当てている。この Labels はその機能によっていくつかに分類されている。登場人物の

会話には 2 つのグループの Label が見られる。Reporting Speech Labels と Speech Labels の 2 つである。Reporting Speech Labels は伝達動詞を含むクラスターで、*returned mrs sparsit with a, kate my dear said mrs, returned mrs sparsit with a* などである。*returned mrs sparsit with a* は Mrs. Sparsit に特有のクラスターで *with* の後には *with a shake of her head* などの body language や *with a kind of social widowhood* などの語り手の解釈が見られる。*kate my dear said mrs* の 5 語のクラスターに関しては、8 回見られ、その後にはすべて固有名詞 *Nickleby* が続き、また 29 回ある 3 語のクラスター *Kate, my dear* も Mrs *Nickelby* の会話の中に見られる。このようにこれらのクラスターはある特定に人物に用いられている。

以上、本書の各章の概要と興味深い用例を一部紹介した。本書は、コーパス文体論の理論的な枠組みを提示し、実践的な分析として、Dickens の作品に見られる繰り返されるパターンであるクラスターに注目して、Dickens の小説の世界を組み立てているブロックとしてクラスターがどのような機能と役割を果たしているかを論じている。コーパス言語学の成果をコーパス文体論に援用した優れた著作である。

文学作品の言語文体分析は、言語事実の指摘とともにその文学的な解釈が重要である。それはコーパス文体論だけでなく、コーパス言語学においても同様で、言語事実の指摘だけでなくその説明や解釈が重要である。その意味では、文体研究に関心がある研究者だけでなく、コーパスを使って言語研究を行っている研究者にも読んでいただきたい研究書である。

“Description without explanation is at least a first step on the road to a full investigation of some linguistic feature.” (McEnery 2006: 4)

昨年 2 月に Mahlberg 氏が勤務するノッティンガム大学で、Peter Stockwell 教授主催の認知文体論の Conference “Cognitive Grammar in Literature” に出席した。そこで、彼女と数年ぶりに再会し、その時に本書をいただいた。2007 年に国際文体論学会の学会誌 *Language and Literature* で彼女が拙著を書評してくれたが、その際に拙著を 3 回読んだと言われた。どこかで彼女の本を紹介しなければと思っていたので、本 Newsletter で本書を紹介できて、少しだけ責任を果たせた気がしている。

参考文献

Korte, B. (1997) *Body Language in Literature*. Toronto: University of Toronto Press.

McEnery, T. (2006) *Swearing in English: Bad Language, Purity and Power from 1586 to the Present*. London: Routledge

堀正広
(熊本学園大学)
hori@kumagaku.ac.jp

2014 年 7 月 5 日発行

編集・発行 英語コーパス学会
会長 堀 正広
事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8
大阪大学大学院言語文化研究科
田畑 智司研究室気付
電話 : 06-6850-5866
e-mail: jaecs.hq@gmail.com twitter: @JAECs2012
URL: <http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecs/>
